

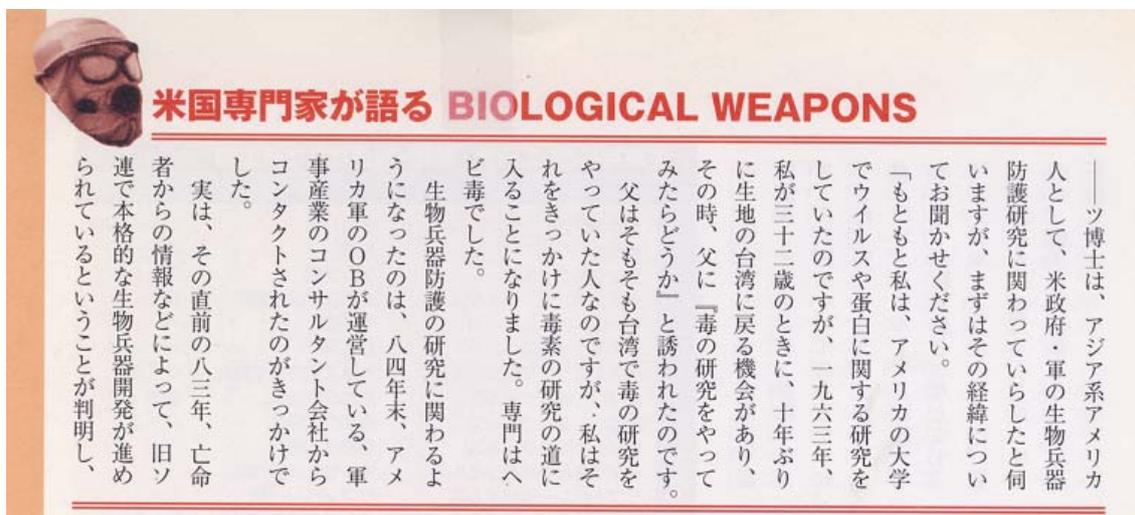
1-2 Anthony T.Tu 教授(アンソニー・トゥ、)、(台湾メイ;杜祖健(と そけん))、

[毒性学](#)および[生物兵器・化学兵器](#)の世界的権威として知られています。[1930年](#)、[台北市](#)で生まれました。[台湾大学理学部](#)を卒業後、アメリカに渡り、[ノートルダム大学](#)、[スタンフォード大学](#)、[エール大学](#)で[化学](#)と[生化学](#)を研修しました。[ユタ州立大学](#)で教職を得、[1967年](#)コロラド州立大学に移籍。[1998年](#)に名誉教授となりました。現在、[千葉科学大学教授](#)とのことです。

[オウム真理教](#)による一連の[サリン](#)事件で、[日本の警察](#)当局にサリンの分析方法を指導するなど
の業績で、[2009年旭日中綬章](#)を受章しました。



1-3 若き日の Tu 教授



上記の書籍のインタビュー記事の冒頭の部分を引用しました。はじめの所で何故、Tuさんがこのような研究を始めたかと言うことが簡単に語られています。この数行の話を掘り下げてみましょう。1963年の台湾への里帰りの話があります。実は、台湾からアメリカに帰る途中に東京に立ち寄っているのです。東京都立大学の私達の研究室も訪ねているのです。

「やっとPH. D. の学位が取れたこと、ネバダ大学の助教授の職を得たこと、新しい研究室の研究テーマに蛇毒を選びたいことなど。このテーマは実は父親の薬理学者 杜聡明の助言であること」などと熱心に語ってくれました。彼はあまり語りたがらないのですが、薬理学者とは(台北帝国大学医学部教授)のことです。

私達の研究室(佐竹一夫教授)ではヘモグロビン(ウマからカツオへ)、魚(マクロ)のインスリンなどの研究を行って行っていましたので、話題に不足はありませんでした。ラジオを買いたいと言うことで秋葉原へ連れて行ったりしました。とにかく日本語は標準の日本人以上の日本語でした。店員達は日本のことを知らない日本人に出会った感じで、私はその解説をする立場であったわけです。併し、実際のTuさんの目的は私達の研究室ではなかったのです。

1-4 ウミヘビ毒・エラプトキシンと田宮信雄教授

その当時、田宮信雄教授の研究室(東京大学—東京医科歯科大学)ではウミヘビの毒素タンパク質の研究を活潑に行っていました。(南海に夢を追った生化学者、田宮信雄)

その頃、田宮さんはウミヘビ採取にこっていて、研究室にいるより、ウミヘビ採取の方が楽しいと言っています。すでにアミノ酸構造の解明が進んでいました。Tuさんはこの

研究をモデルにしたかったのです。その調査がその目的であったでしょう。

ところで私と田宮信雄さんとの関わりですが、その頃、数年間、赤堀四郎教授が東京大学と大阪大学との兼任教授でありました、その意味では私と田宮さんとは兄弟弟子の間柄です。東京大学系の赤堀研究室の一つが田宮さんの研究室で、大阪大学系の赤堀研究室のひとつが東京都立大学にあった私のいた佐竹研究室です。田宮研究室では毒素の研究以外に研究装置の開発も行っていました。田宮さん自身は生化学に応用する質量分析装置の開発に関わり、一方、アミノ酸分析装置の開発には都立大学から小沢均さんが移籍して行っていました。その工作には色々と相談に乗ったこともありま

した。
田宮さんとは、初めから何となく気分が会う間柄でしたが、そのうちに、いろいろのことが解ってきました。実は田宮さん一家は大阪の出身で、墓所は大阪市阿倍野区にあり、わたくしの育った生家からすぐ近くです。

田宮猛雄先生を偲ぶ

著作者等	田宮猛雄博士追悼録刊行会
出版元	メディカルカルチュア
刊行年月	1964

お父さんの出身中学校は解りませんが、叔父さんの（クロレラの開発で、あまりにも有名な）[田宮博](#) 東京大学理学部教授は大阪府立天王寺中学校(旧制)での私(48期)の大先輩(22期)になります。その同期生には東京大学医学部教授の緒方富雄さんも居ました（私が閉鎖までの暫くの間、理事を務めた財団法人緒方医学科学研究所を作った人です。又、その叔父さんの緒方知三郎（東京大学医学部教授）もこの中学の卒業生です(2期)。またこの姓から想像されるように、緒方洪庵の孫とひ孫です。晩年の緒方知三郎さんとはある講演会で講師として席を並べたこともありま

した。）
田宮研究室のクロレラの実験は、徳川生物学研究所(目白)で円形の培養池で行われていました。その実験を何度も親しく見学したものです。その直接の実験担当者であった柴田和雄教授は、のちに東京工業大学に移り「タンパク質の状態識別試薬の研究」を始めました。研究室同士が近くなった故で色々と交流がありました。

1-5 713部隊(日本のバイオテロ部隊?)と田宮猛雄教授

さて、田宮信雄教授の父君は田宮 猛雄教授です

(たみや たけお)、(1889年(明治22年)1月31日 - 1963年(昭和38年)7月11日)

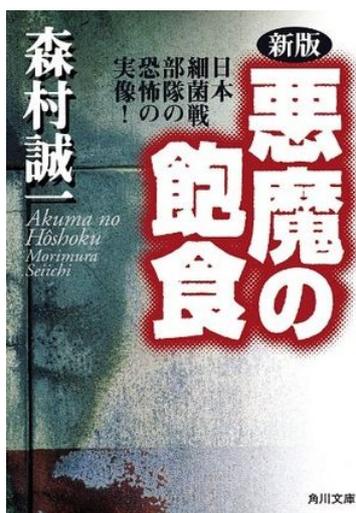
戦争中、すでに東京大学医学部教授(衛生学講座)でありました。、発疹チフスなどのリケッチア症の病原体や媒介動物などについて研究を行い、細菌学や免疫学を専門としていました。

そのような事情で、関東軍防疫給水部本部にあった満州第七三一部隊の人員配置などの後ろ盾をつとめました。

731部隊(ななさんいちぶたい)は、第二次世界大戦期の大日本帝国陸軍に存在した研究機関のひとつ。正式名称は関東軍防疫給水部本部で、731部隊の名は、その秘匿名称(通称号)である満州第七三一部隊の略。このような通称号は日本陸軍の全部隊に付与されていた。初代部隊長の石井四郎(陸軍軍医中將)にちなんで石井部隊とも呼ばれる。

満州に拠点をおいて、防疫給水の名のとおり兵士の感染症予防や、そのための衛生的な給水体制の研究を主任務とすると同時に、細菌戦に使用する生物兵器の研究・開発機関でもあった^[1]。そのために人体実験^{[2][3]}や、生物兵器の実戦的使用を行っていたとされている。細菌戦研究機関だったとする論者の中でも、その中核的存在であったとする見方がある一方で、陸軍軍医学校を中核とし、登戸研究所等の周辺研究機関をネットワーク化した特殊兵器の研究・開発のための実験・実戦部門の一部であったという見方も存在する。 出典世界日報のあゆみ

森村誠一という小説家が日本共産党機関紙「赤旗」の下里正樹・特報部長と共著で「悪魔の飽食」という本を書きました。ドキュメンタリー・ルポということで、731部隊が人体実験を含む悪逆非道な実験を行ったかという物です。そのために田宮猛雄教授は悪く言われたりしました。しかし、ノンフィクションをうたっておきながらの虚偽、捏造でありました。1982年、作家・森村誠一氏と著書『の「細菌戦研究のための生体解剖写真」二十六枚中二十枚がねつ造写真であることを暴露されたのです。



Amazon 新版 悪魔の飽食 日本細菌戦部隊の恐怖の実像! (角川文庫)

新版 悪魔の飽食 日本細菌戦部隊の恐怖の実像! (角川文庫)

新版になり、以前絶版となった原因の捏造写真、矛盾証言は綺麗になくなっています。しかしながらいまだに「内容に脚色があります」の一言もありません。特定の政党に傾倒していた小説家による、ドキュメンタリールポではないドキュドラマ。プロパガンダの良い教科書と言えます。

[1945年](#) 医学部長、[1948年](#) [日本医学会](#)会長、[1949年](#) 東京大学を停年 名誉教授、1950年 [日本医師会](#)会長、[1962年](#) [国立がんセンター](#)総長などの職をつとめ、日本のために色々と貢献しました。

1-6 捏造書 ノンフィクションードキュメンタリー

森村誠一 「悪魔の飽食」—731部隊

本だ勝一 「中国の旅」—南京大虐殺

吉田清治 「私の戦争犯罪」—慰安婦問題

3捏造書はいずれもドキュメンタリーと称するそ小説(フィクション)です。共産党、中国、韓国がらみで日本に損害を与えることになるのです。著者がその誤りを認めてもその内容が生き残るのです。

1-7 以上のような話をな眺めてみると私の近辺で起こっていたことだけでも、いろいろの変転と人生の縁を感じます。関わった人々は多くは故人となっています。

**

**

**

**

2) 第56回定例会(2014/05/23)の報告

2-1 出席 9名 メール送付数 約800



2-2 小林英三郎さん パリからの Skype 参加です。
Sartrouville の小林家の庭です (2014/6/15 受信)



2-4 次の資料を配布しました。

- ① 「タンパク質の反乱」—病気の陰にタンパク質の異常あり— 石浦章一著
(2001) (3刷) 〈ブルーバックス B-1225〉 株式会社講談社
- ② 「脳とプリオン」—狂牛病の分子生物学— 小野寺 節・佐伯 圭一
(2001) (3刷) 〈応用動物科学/バイオサイエンス/3〉 朝倉書店
- ③ 「狂牛病のすべて」—ファクト・ブッカー—
日経メディカル、日経バイオテック、バイオテクノロジー・ジャパン
編 (1996) 日経 BP 社
- ④ 「プリオン説は本当か?」—タンパク質病原体説をめぐるミステリー— 福
岡伸一 (2007) (7刷) 〈ブルーバックス B-1504〉 株式会社講談社

＊ ＊

＊ ＊

＊ ＊

＊ 1 公益財団法人東京しごと財団 より助成事業への参加者募集がありました。
応募してみるつもりであります、

＊ 2 川崎さんが {医学と生物学} 復刊はの一案をしめしていただきました。検討してゆく
予定です。

＊ ＊

＊ ＊

＊ ＊

3) 第 57 回定例会のおしらせ。

バイオテクノロジー標準化支援協会 第 57 回 定例会

日時 2014 年 06 月 27 日(金) 14 時 00 分—16 時 00 分

参加費：無料

＊ (定例会は会員でも会員でなくても自由に出席して、自由に発言も出来ます。)
友人同士誘い合わせてご出席ください。出席するのが面倒な方はメールでご意見をお寄せください。

場所 八雲クラブ (ニュー渋谷コーポラス 10 階・1001 号) (首都大学東京同窓会)

住所： 渋谷区宇田川町 12-3

電話番号： 03-3770-2214

(地図はグーグルで八雲クラブ案内図) **赤い矢印の場所**です、。



話題

「危険管理」「Risk Management」

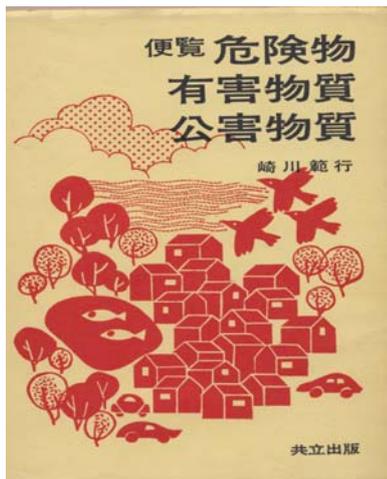
- * 1 SABSJournal No46 定例会 38 に示した話題の再録です。
ISO 9000,の制定が大当たりをとり、ISO に大きな利益をもたらしました。
日本の JIS は追従することによって少しの利益を得たようです。
併し、世界は変化し、次のような課題が発展しつつあるようです。

ISO 9000	品質マネジメント	JIS Z8100
ISO 14000	環境マネジメント	JIS Q14000
ISO 22000	食品安全マネジメント	**** HACCP
ISO 26000	企業の社会的責任	JIS Z26000
ISO 27000	情報セキュリティマネジメント	JIS Q27000
ISO 31000	リスクマネジメント	JISQ31000
ISO 50000	エネルギーマネジメント	****
ISO9241	人間工学	JIS Z8500

* 2 大島輝夫さん(Liaison-officer)の最近の講義

化学物質管理のセミナー—[海外化学物質規制の最新動向](#)

[GHS\(Globally Harmonized System of Classification and Labelling of Chemicals\)](#)



上記の書籍は河崎範行さんの物です。(1980)(7刷)共立出版

世の中は大きく代わってしまっています。

* 3 一方で、世の中が騒がしくなって、戦争含みの時代になっています。

実際の戦争(Hardな戦争)もあちらこちらで起こっていますし、日本も逃れられるかどうか解らない時代になって来ました。ISO27000は企業だけの話ではなくなり、国家間の対立となり、情報戦争(ソフトな戦争—Cyber War)はすでに世界ではじまって居ます。

自衛隊はがんばって立派な兵器を色々そろえ、訓練もしてきましたが、この新しい型の戦争に立ち向かえる**軍隊**は足りません。近頃、定年退職した自衛隊のリーダークラスの方々の意見がTV 上で聞けるようになってきましたが、動も頭の動きが鈍いような感じがして仕方ありません。教育内容のやり直しが必要です。

.**

**

- 5) ホームページにe-library のリストがあります。会員の方はその中から希望のものをご指摘ください。**